
黒き髪の歌姫

酒井 優羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き髪之歌姫

【Nコード】

N7249J

【作者名】

酒井 優羽

【あらすじ】

蒼天国第一王女 蒼 瑛蓮^{えいれん}は、隣国のウィルレイシア国から親睦を深めるためにと招かれる。瑛蓮は、ウィルレイシアの第一王子 ヴィエナと会う。国は豊かで、みんな楽しそうなのに、あの人は何故苦しんでいるの——？

姫と王子、二つの国、恋と野望が混じり合うファンタジーが今開幕——！！

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介

《蒼天国》

蒼そう 瑛蓮えいれん

・ ・ ・ この物語の主人公。蒼天国の姫。黒く美しい髪と青い瞳が特徴。

紗さ 燕姫えんき

・ ・ ・ 蒼天国の后。国一番の美女。王子二人と瑛蓮の母親。

蒼そう 龍斎りゅうさい

・ ・ ・ 蒼天国の国王。臣下や民からの信頼が厚い。

蒼そう 醒輝しゅうき

・ ・ ・ 蒼天国第一王子。瑛蓮の兄。

蒼そう 景蘭けいらん

・ ・ ・ 蒼天国第二王子。瑛蓮の兄。

普ふ 璃光りこう

・ ・ ・ 国王・龍斎の側近。昂貴の父。賢く有能な官吏の一人。

普ふ 昂貴こうき

・ ・ ・ 璃光の息子。国軍に所属している。少々お馬鹿。

魯ろ 安珠あんじゅ

・ ・ ・ 瑛蓮付きの侍女。

紗さ 漂姫ひょうき

・ ・ ・ 紗一族の当主。蒼王の後・燕姫の姉。

《ウィルレイシア国》

ヴィエナ・ラウル・フォン・ウィルレイシア

・ ・ ・ ウィルレイシアの第一王子。国王が病気のため、自身が国の中心となり働いている。美形。

ヴィネシス・サウス・フォン・ウィルレイシア

・ ・ ・ ウィルレイシアの第二王子。ヴィエナの異母弟。

リフェルザ・アルフレッド・フォン・ウィルレイシア

・・・ウィルレイシアの国王。

リユイ・ファウス・ラーゼン

・・・ヴィエナの側近。モノクルを身につけているのが特徴。

ロアナ・アリシア

・・・ウィルレイシア国王の后。リフェルザの二人目の妻。ヴィネシスの母親。

セルシア

・・・ウィルレイシア王宮の筆頭女官。

マリア

・・・ウィルレイシア王宮で働く女官。

ザリアス・ロウェナ・フォン・ウィルレイシア

・・・リフェルザの実弟。国内の別荘で生活している。ヴィエナとはまた違う美形。

ジャン・カルロス

・・・ザリアスの側近。

序章 少年の悲しみ（前書き）

初めての小説です。未熟者のワタシですが、どうかこの物語にしばしお付きあいくださいませ。

序章 少年の悲しみ

夜の庭を少年は、あるいていた。たった一人で。

城には、楽しいことなんてない。まして安心できる場所でもない。機嫌をとろうとする者、自分を殺そうと企む者、野望と欲望が溢れるあの城には、自分は居場所は本当にあるのか。

——僕はどうして生まれたんだろう？

——なぜ『王子』として生まれたんだろう？

答えは返ってこない。だからといって王である父と今は亡き母を責めたり、憎んだりできない。どんなに辛いことが起こっても……。少年は、心の優しい持ち主だから。それがこの先己を苦しめる物の一つになっても。

少年は、考えて考えて考えて、誰も信じないことに決めた。自分の利益しか考えない者達が多いあの城には、信じられる者などいないのだから。自分しか信じない。それがあの場所で、この国で生きる術。^{すべ}

けれど、少年は思った。自分が成長し、大きくなったらこの国をもっといい国にしよう。誰かが自分のように悲しむことがないように。苦しむのは自分だけでいい。……。でもこの何ともいえない気持ちには……。なんなのだろう……。

数年がたち、少年は、立派な青年になった。だがそれでも彼は誰も信頼していなかった。

ただ——自分以外の者が、民が幸福でいられるのなら……。青年はもう自分のことなど考えていなかった。

——青年は孤独だった。どうでもよかった。・・・否。
自分が何を思っているのかわからなかった。自分が何故悲しんで苦
しんでいるのかも。もう、何が何なのか、青年はわからなかった。

序章 少年の悲しみ（後書き）

えーと。なんかイキナリ暗い感じで始まっちゃいましたが、これからどんどんこの物語は進んでいきます。いや、あの暗い感じでじやなくて。まだ登場していませんが、瑛蓮ちゃんと悩める王子ヴィエナをどうかよろしくおねがいします。

これから頑張ります。頑張らせて頂いちゃいますよっ！！では、
酒井 優羽でした。

一章 始まりは突然に・・・

七つの州からなる王国、蒼天国^{そうてんこく}。その一つ蒼州の王都・賜泉^{しせん}にある王宮の一つ清瑞宮^{せいすいきゆう}は、昔から国王一家の住まいだ。そして、その庭――・・・

「おみごとつ！！」

的の中心に矢がささる。

「見事ですわ。瑛蓮様^{えいれん}。」

矢を射た人物に向かって侍女が言う。『瑛蓮様』と呼ばれた人物は、振り返って笑う。

「ありがとう。安珠^{あんじゆ}。やっぱねえ〜たまに練習しておかないと腕鈍んのよ。」

彼女の名は、蒼^{そう}瑛蓮^{えいれん}。この蒼天国の姫だ。長く美しいその黒い髪は日の光を浴び、光沢をはなっている。容姿も年頃の女の子にしては『可愛い』よりも『綺麗』のほうが似合うだろう。

ただ、珍しいところと言えば目――瞳の色だろう。この蒼天国では普通、黒や茶系の色をした目の者が多い。だが、瑛蓮は、――青いのだ。国の名のようにまるで何もかも見透かしてしまふような青い目をしていた。

母様^{かあさま}も目が青いのよね。血かしら？でも、上の兄さん達は茶色よね。同じ腹から生まれてるのに。・・・なんでかしらね。ってゆうか――

「あのねえ。アンタなんでそんなトコに隠れてるのよ！軍の仕事があるんじゃないの？」

瑛蓮が、庭の垣根^{かきね}を見ながら言う。そして、ガサガサとそこから現れたのは鎧を着た青年だった。

「今、休憩中なんだよ！」

と、青年——普^ふ 昂貴^{いっけい}は、頭や肩やらにくっついていて葉を手で払いながら言った。それを見ながら瑛蓮は怒鳴った。

「休憩中ならなんで隠れる必要があんのよっ!!」

瑛蓮にそう言われ昂貴は、目をハツと見開いた。

「そっか!!」

ついでに手をポンツとうつ。

「なあゝにが『そっか!!』だっ!!」

コイツ・・・昔からなんかヌケてるとゆうか馬鹿よね!。瑛蓮は思った。二人は、幼なじみだ。昂貴は、こんな明るい性格なので一緒に遊んだりもした。だから瑛蓮が一国の姫でもお互いこうして立場を気にせずに話している。もちろん、時と場所は考えてだ。

昔は、私より小さかったのにいつの間にか大きくなっちゃって・・・。男の成長つてすごいわね。昂貴は、国軍に入り、体格はどちらかとゆうと華奢なほうだが、日々の訓練などのせいか以前よりがっしりしている。頭はアレだが、顔は良い方だと思う。とゆうか性格も悪くない。

「ちょっと!毎回のように瑛蓮様の前にフラツと現れて!慣れ慣れしく話されてっ!どうゆうおつもりですの?!」

安珠が、昂貴に詰め寄る。

「安珠、私が許しているからいいのよ。コイツは。」

と、二人が言い争いになる前に瑛蓮が止めに入る。すると――

「瑛蓮様。」

名前を呼ばれて振り向くと宮の廊下に一人の男が立っていた。

「げっ！親父！」

瑛蓮の後ろで昂貴が苦い声をあげるが放っておこう。側で安珠が男に会釈する。

昂貴の親父——普^ふ 璃光^{りこう}。蒼王の側近であり有能な官吏の一人。今年で42歳になるが、その年齢を感じさせないその笑顔は王宮の侍女達を虜^{とりこ}にしている。侍女達の間で『ふー兄様』と呼ばれていることは彼は知らない。

「これは璃光殿。どうかされました？」

瑛蓮が言つと

「蒼王がお呼びでございます。」

と、答えた。

父様^{とうさま}が？こんな時に珍しい。私になんの用があるのかしら？

璃光は、昂貴と安珠をみながら言った。

「丁度良い。昂貴、お前も来なさい。安珠殿もね。」

「はいっ！」

昂貴が元氣よく答えた。

そして璃光に連れられて瑛蓮達は、国の政^{まつりごと}を行^なう宮——王の職務室へと向かった。

静かに……静かに……事ははじまろうとしていた。

一章 始まりは突然に・・・（後書き）

ほんつとに久しぶりの『歌姫』！すいません！やっとアップすることができました。これから頑張ります。瑛蓮をどうか温かく見守ってやってくだされば・・・そして次回いつ投稿されるか分からないこの物語（↑オイ）に最後までつきあってくだされば光栄です。あと！感想などがあればぜひ！ヨロシクです！

二章 王の命令

「主上、姫君を連れて参りました。」

璃光が先頭に王の職務室へと入る。そして、王が仕事をしている机へと足を進ませる。瑛蓮達は、片膝をつき、頭を垂れた。

「父上。何用でございましょうか。」

すると、頭上から低い声がふってきた。

「まずは、瑛蓮、そして昴貴と安珠も面を上げよ。」

蒼王・蒼 龍齋の声が部屋に静かに響いた。そして、顔を上げた娘を見て、

「これを見る。」

と、机上にある木箱を指さした。瑛蓮は、その木箱の装飾から蒼国の物ではないことがわかった。

「これは・・・」

「西にあるウィルレイシア国から、つい先ほど使いが来てな？その中に入っていた文には、両国の親睦を深めたいから城に招待すると書かれていた。ああ、送り主は、現国王リフェルザ殿からだ。」

瑛蓮は、龍齋を見た。

「確か・・・リフェルザ様は、病で寝込まれているはずですよ？」
その問いに璃光が答えた。

「今、ウィルレイシア国はリフェルザ殿の代わりに、第一王子・ヴィエナ様が国をまとめておられるようです。でも、まあ手紙を書けるぐらいの元気はあるようですね。」

笑顔で答えた璃光から目線を龍齋に変える。この私を職務室によんだってことは――・・・

「私に行けと？ウィルレイシアに・・・？その務めをを私に？」

「おおおっ！！よくわかったなあっ！あたり、あたり！」

と、龍斎が面白がった声をあげる。瑛蓮は、そんな父の反応に腹がたった。

「頼み方つてものがちゃんとおるでしょーがあっ！！」

安珠が、ため息をもらす。また、主上は瑛蓮様で遊ばれて……。隣を見ると、昂貴が笑いをこらえ、手を口にあてていたので、蹴りをいれてやった。

「なんで、私？兄様達じゃなくて？——！！まさか、父上、これを機に嫁げって話じゃないでしょーね？！」

「あっ！！それも良いかもしれんっ！！」

と、龍斎がポンツと手をたたく。この父親は——！！

「主上！それなら瑛蓮様をオレにくださいっ！！」

と、昂貴。すかさず父・璃光が持っていた書簡しょかんで息子の頭をおもいつきり叩いた。

「どさくさにまぎれて何言っちゃってるんですか、君は。」

「いつてえ——！！」

昂貴は、頭をおさえた。璃光が続ける。

「主上、お話の続きを。」

「おお。そうだな。まあ……。ウィルレイシアに行つて欲しい。他国との交流も大事だからな。」

「だからって……。なんで私ですか。姫の私よりも王子の醒輝しよつき兄上や、景蘭けいらん兄上のほうがいいでしょう？」

瑛蓮が、不満げに言う。まだ、さっきの父のからかいの言葉がひっかかっているようだ。

「醒輝と景蘭は、今他に仕事がある。」

「……。何ですって……。」

絶対に父上、私にウィルレイシアに行つて欲しいんだわ！そう思っているといきなり父の——王の厳しい声がとんだ。

「ぐだぐだ言うな。これは私の——王の命令だ。」

そう言った龍斎からは、王の威厳などが感じられた。瑛蓮は、ハツとし下を向く。

「失礼をいたしました。私がウィルレイシアに参りましょう。蒼王のご命令のままに。」

「よし。普^ふ 昂貴^{けい}、魯^ろ 安珠^{あんじゅ}。そなた達も姫に同行しウィルレイシアへ向かうように。」

「はっ！！」

昂貴と安珠が返事をする。瑛蓮が、龍斎を見る。

「では、明日の明朝にでも発ちましょう。そうすれば向こうへ夕方までには着きましょう。」

その言葉に龍斎がうなずく。

「うむ、そうしてくれ。では、下がれ。」

その言葉に瑛蓮、昂貴、安珠は立ち上がり、王の職務室から退室した。

瑛蓮は、いきなり命じられたせいで頭が混乱していた。自分がウィルレイシアに行けと言われたことにまだ納得できていなかったからだ。なぜ——？やはり姫とゆう王族の立場からだろうか。だが、瑛蓮は、納得できなかった。なにか・・・おかしい気がする。そう、思っている自分がダメなのだろうか？——答えはでなかった。

——ウィルレイシア国ね……………。

二章 王の命令（後書き）

はい！動きだしました（物語が）。感想などよろしくお願いします。

三章 紗 燕姫

瑛蓮達が出て行つた扉がまたすぐに開いた。入ってきたのは一人の女性。

「燕姫^{えんぎ}……。」「

龍齋が入ってきた女性を見てその名をつぶやいた。隣にいた璃光が入ってきた人物にお辞儀をする。

「瑛蓮に言つたのじゃな。」「

部屋に優しい、けれどどこか気の強そうな声が響く。紗^さ 燕姫^{えんぎ}、蒼王・龍齋^{りゅうさい}の后^{ごう}で、王子二人と姫を産んだ。そしてその姿は、瑛蓮と同じ長く美しい漆黒の髪に青い瞳をしていた。

それだけではない。燕姫は、蒼天国一の美女と謳われる美姫だ。その美しさは、身につけている着物や、見事な輝きを見せている装飾品に負けることは決してない。

「瑛蓮とすれ違つた時に、面白い事を言つておつたぞ。『父上のドアホ』とな。」「

燕姫は、白く美しい手を口にあてクスクス笑う。その笑顔は、何人もの男を気絶させそうだった。

「仕方ないだろう。なあ、璃光？」「

と、龍齋がため息をつきながら璃光を見る。璃光も『そうですね。』と言つた。龍齋が燕姫を見て言う。

「それにな、さつき『明朝に発てば向こうに夕方に着く。』と言つていたんだぞ？」「

それを聞き、燕姫は目を丸くした。

「それは馬に乗って休み無しでひたすら駆けた場合であろう?! 瑛蓮……頭が混乱しておるのう。ウィルレイシアにはおしのびだから馬車で行くはずであらうて。」「

その言葉に王の隣にいる璃光がうなずく。

「その通りです。馬車なら、まあ・・・なるべく足が速い馬を選びますが・・・そうですね、三日はかかるでしょう。とゆうか瑛蓮様がおっしゃっていたのは、きっとケモノ道などを通り近道をしまくった場合でしょうね。」

璃光は苦笑混じりの声でそう言ったが、聞いていた燕姫はため息をつき夫・龍斎を持っていた扇あふぎでピシャツと見事な速さで叩いた。

「原因は、全てそなたのせいであろう！いつもいつもヘラヘラ笑って息子、娘で遊びおつて。王として仕事はしっかりしているのじゃろうが、父親としては最低じゃな！」
と、燕姫が怒鳴る。

「全く・・・痛いなあ。」

龍斎は燕姫に叩かれた場所をさすった。しかし、すぐにさつきまでとは違う真剣な表情かおをして妻を見た。そして、

「瑛蓮をウィルレイシアに行かせたいと言ったのは、おまえだろう？」
「？」

龍斎が続ける。

「関係しているんだろう？おまえの一族——・・・紗一族さいいちぞくに。」

それを聞いた燕姫も璃光も真剣な顔になる。

紗一族——蒼天国の北にある鳳州ほうしゅうに在る一族。昔からある由緒正しい貴族の一つ。

だが、紗一族は他家とは違った。術者、巫女、占者せんじゃ——異能や能力を持つ一族。だから、あまり表舞台にでてはいない。そして——

——蒼王の後・紗 燕姫の生家。

ただ——唯一関わっているとしたら、この蒼天国を守る結果をはり守護し、人に害のある霊や妖あやかしなどの『目には見えないモノ』

達から守っていることだろう。それには龍斎も誰もが感謝していること。だが、同時に紗一族は、厄介な一族でもあった。

燕姫が口を開く。

「紗家当主————わたしの姉・紗さ漂姫ひょうきが、瑛蓮を狙って動き始めているやもしれぬのじゃ。」

四章 天上の星はその動きを止めぬ

「紗さ 漂ひょう姫ぎが、瑛えい蓮れんを狙ねっているだと？また・・・なんで？」

龍りゅう斎さいの言葉に璃り光こうもうなずく。どうやら思ったことは、同じだったようだ。二人の視線が燕えん姫ぎにむく。

「姫様の、瑛蓮様のお命を狙ねっているということでしょうか？」
と、璃光。

「そもそも、なぜそれがわかったのですか？あつ・・・・・・・・・・」
星読み』ですか。」

燕姫が当たりとでもゆうふうに頬をゆるませた。

「そうじゃ。星の位置、それぞれが表すもの————などから現在、過去、未来が知ることができる術。まあ、全てが分かるわけではないがの。だとしても紗一族の血のせいこそこの学者共よりはくわしく読めることができる。」

燕姫がバサツと扇をひろげる。そして静かにあおいだ。

「星読みでわかったのは、漂姫姉上が瑛蓮を狙ねっているとゆうことだけじゃ。なぜ、狙ねっているのかも今は分かん。それ以上は、星が語らなんだ。狙ねっているのが命なのか・・・瑛蓮自身か。」

璃光が、それを聞き言う。

「だから・・・お后様は、瑛蓮様を守るためにウィルレイシアに行かせたかったのですね？いくら紗一族でも他国にいる姫には手がだしにくから・・・。」

「納得できん。」

いきなり龍斎が言ったので燕姫と璃光は驚いた。

「いくら紗一族でも、王家の姫に手をだすなど。命を狙ねっていると、もしそうなったら・・・紗一族の当主は自分達が後々どうなるかわかっているんだろうな？死罪じゃ済まんぞ。」

それはそうだ。だが、その龍斎の言葉に璃光がコホンとわざとらし

く咳をした。そしてまるで『アナタ大丈夫?』というふうな目つきで主を見た。

「主上、もうお忘れですか? 紗一族は自分たちの一族の事となると一番容赦がなくて面倒な一族じゃないですか! それは主上が一番わかっておられると思っていましたが? お后様を奪いに――失礼――」

――もらいに帰ってくるまでどれほど大変だったか……!」
璃光の言う通りだった。実際、龍斎と璃光が燕姫を紗家から連れ出すまでそうとう苦労したのは確かだった。あの時ほど自分はもしかして死んでしまうのではないのかと思つた事はない。それほど紗一族の者達が持つ能力はすごいのだ。そして厄介……。

だから――……

「忘れた。……はい、すみません。ちゃんとよく覚えてます。だからその扇を下ろしてください。」

龍斎が扇を構えている燕姫に謝つた。そんな様子を見て璃光は深くため息をついた。龍斎は二人を見ながら言つた。

「……厄介な事になりそうだな。私も、我等も対策を考えなければなるまい。向こうはただの一族ではないからな。どっちにしろ油断はならない。まあ、瑛蓮が明日からウィルレイシアに行つたとしてもだ。このことはあまり他には言いたくはない。もちろん、瑛蓮に言つな。そして……燕姫。」

「なんじゃ?」

「紗一族……紗 漂姫は瑛蓮を狙っていることに本当に間違いないな?」

燕姫が龍斎の言葉にうなづく。そして、まっすぐに龍斎を見た。

「間違いない。星は……空の星は永遠に動き、そして嘘はつかぬ人間と違つてな。だから信頼できるのじゃ。星読みの術はな。」

燕姫はそう言い、龍斎と璃光に背を向け部屋から退室した。燕姫が

出て行った扉を見て龍斎はポツリとつぶやいた。

「無理はするなよ・・・燕姫。」

燕姫は自分の部屋へと歩いていった。後ろからは、さっきまで王の職務室の前で待っていた二人の侍女を引き連れて。

星は動き続ける。永遠に。そして嘘はつかず未来を教えてくれる。そのことに偽りはない。確かに星読みで姉が瑛蓮を狙っているのは本当だ。だが、・・・燕姫はもう一つ星達が教えてくれた事をあの二人には告げなかった。

もう一人、狙われていることを・・・。

遠く離れたところ・・・。ウィルレイシアでは・・・。

「蒼天国から誰がいらっしゃるのでしょね、ヴィエナ殿下。」

モノクルをつけた青年が言った。窓から外の景色を眺めている金髪の青年にむかって。そしてその青年は言った。

「・・・誰でもいい。別にな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7249j/>

黒き髪的歌姫

2010年10月10日06時19分発行